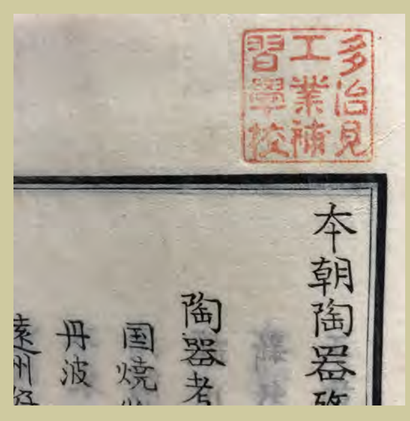
多治見工業補習学校 (2)

多治見工業高等学校創立より以前に わずか二年間存続していた

多治見工業補習学校と その蔵書印のある書籍



○『本朝陶器孜證』

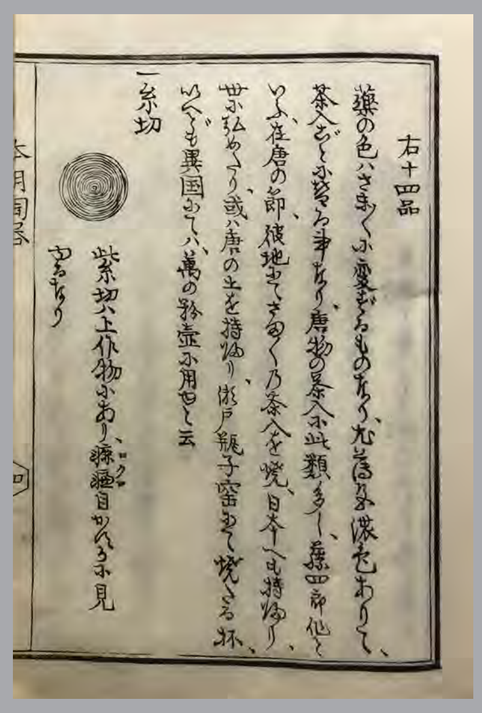
前号で紹介した多治見工業補習学校は、土岐郡立陶器学校（現在の多治見工業高等学校の前身）より五年も前に開設され、明治二十八年から三十年のわずか二年間だけ存立した実業学校でした。この多治見の実業教育の嚆矢である補習学校の生徒たちはどのような勉強をしていたのでしょうか。

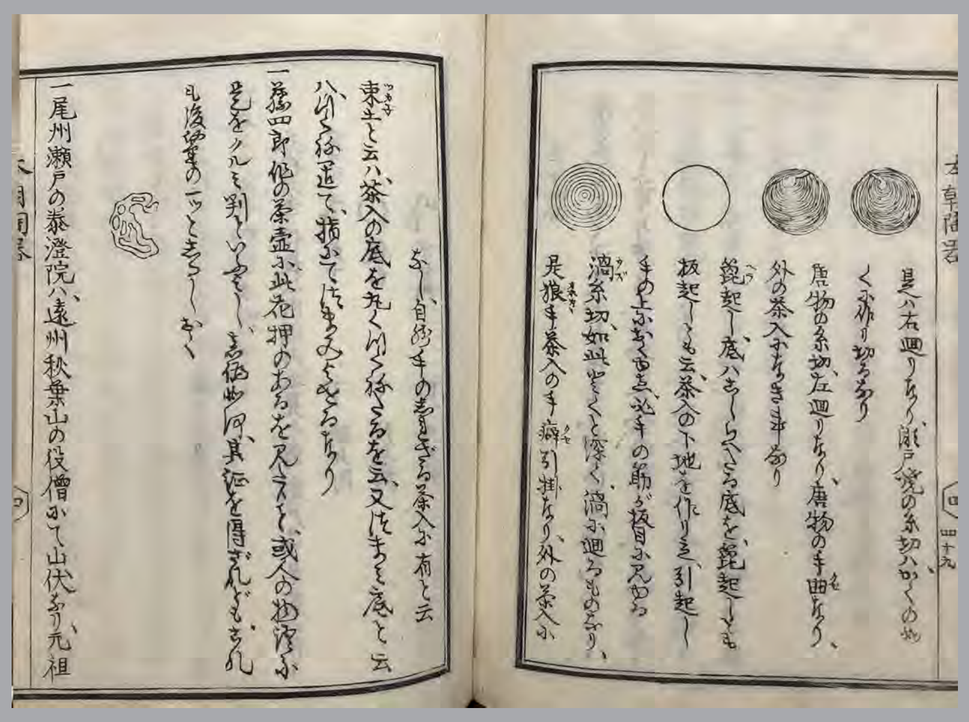
郷土資料室には、それを窺うことのできる二件の書籍がありました。いずれも多治見工業補習学校の蔵書印が捺してあります。ひとつは前回紹介した『工藝新圖』（下）です。今回はもうひとつの『本朝陶器孜證』（一～六全揃）を紹介します。

著者は茶人で国学者の金森得水。生年天明八年（一七八八）没年元治二年（一八六五）。金森自身の跋文（後書）の年紀は安政四年秋八月とある。奥付によると刊行は明治二十七年三月。全六巻揃。

得水は有栖川宮家の門に入るなど国学を学ぶほか、茶人としては表千家の皆伝を受け、宗匠として多くの門人をとった。著書は本書のほかに『古今茶話』五十巻がある。

本書は茶匠らしい視点から、各地の陶窯の歴史と名器の由来などを述べたもので、茶碗や茶入などにも詳しく触れられている。また第六巻巻末に、用途不明の「異形の陶器」について少なからぬ紙幅が割かれており、そのマニアックなところも興味深い。





『本朝陶器孜證』第四巻

ここに紹介したのは、茶匠らしい記述の一つで、茶入の見どころである底部の糸切についての解説です。実はこの解説には拠りどころとなった、いわば底本があり、そこからほとんど引用されたものでした。その引用元は、寛文十二年（一六七二）刊行の『茶器弁玉集』五巻で、小堀遠州門下の茶人やその関係者が編集したと推定されています。またこの書は茶入に関する組織的な記述の最初のものとされており茶人必読の書のひとつであったと思われます。次に『茶器弁玉集』の該当する箇所を記します。金森得水の文章と比較してみて下さい。

丸糸切、此糸切上作物に有轆轤目幽に見ゆる也。
糸切、　是は右廻也瀬戸焼の糸切は如此に造る物也。
唐物糸切、是は左廻也唐物の手癖也外の茶入に無事也。
箆起底、此通に拵へたる底を箆起とも板起とも云茶入の下地を造立引起手上に置故手筋板目必見る物也。
渦糸切、如此通に太くふかく渦に切物也、是の狼手茶入の手癖引掛也外茶入に無之自然手のしれさる茶入有之稀也。
束土、固土と云は茶入の底を丸くつくねたるを云り又つまみ底と云右同通に底を細く拵えたるを云り

『本朝陶器孜證』第六巻

ここには「異形の陶器」が紹介されています。元は江戸時代の考証学者である藤井貞幹の著作から写されたもので、用途の不分明な不思議な陶器が紹介されています。文中「鶏肋」とありますが「鶏肋」とは「大して役に立たないが捨てるには惜しいもの」という意です。まさにマニアックな記述ですが、これが十九頁にわたって紹介されています。

藤井貞幹著集古圖に載る異形の陶器、其用考がたしといへども。亦見證のたよりにもと、鶏肋ながらうつしそへたり、貞幹ハ京師の人無佛齋と号す

郷土のことについて調べるなら
郷土資料室へ

地元に関する資料や市民の皆様から寄せられた文書や記録などを整理し保管しています。保管資料は利用者の方の調べ学習・研究などにもご利用頂けます。
地域の歴史に関するご相談は、郷土資料室までお問合わせ下さい。
市民の皆様からの郷土資料のご寄贈や情報の提供なども募集しております。

多治見市図書館郷土資料室
多治見市豊岡町 1-55　ヤマカまなびパーク４階　JR 多治見駅より徒歩５分　TEL. 0572-23-3783
開室時間：火～土曜日　10 時～17 時（日・月・祝日・年末年始は休室）　※図書館とは開室日・時間が異なりますのでご注意ください。